

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十八巻第七号（通巻第二一一号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 211 号

11. 2011

天覽

品川 鈴子

離宮 画く先づ 秋薔薇に 跪き

秋薔薇の 離宮バー ジンロードめく

離宮 落葉に 黒猫の 肢撓やか

石叩き 離宮の 対称苑に 倦み



併膳に宮廷熟れのオリーブも
浪しぶき罽にちりばめフェルト帽
潮地蔵ごつごつ撫でて悴めり
藤袴もぐり粉まみれ黄化け翅
江戸の墓めぐり厚着の肩重し
天覧の厚岸草も郷語り



玉鈴

吟

兵庫 恒成久美子

笑む遺影弟よりの胡蝶蘭
初蟬を高層にきく旅の明け
さくと割れ小玉西瓜の皮うすき
「猿に餌をやるな」との札緑濃き
谿流の轟く茂り晶子の碑

大阪 角谷美恵子

群れほたる明滅つひに波のごと
駆け足のゆるむ疏水の葭簾
母はまた母となりたる盆休暇
盆をどり箆笥に古き母子手帳
産土の新米まづは療友へ

愛媛 年森 恭子

落し水して合鴨の役終へり
蛇の衣サイズかはりしワンピース
気がつけば子離もして時鳥
庭仕事終へて端居に黙す夫
人避けて最上階に遠花火

兵庫 内藤三男

夏の旅あきらめて妻われ看取る
呻吟の果ての一句や盆の明け
りハビリといふ名の汗に夏去らず
配膳車の音に喜々たり盆病棟
退院の許可告げられし日の暑さ

兵庫 中尾廣美

夏勤行終わりにてほのか明ける朝
夏廊下白き足裏の若き僧
病む友を見舞ひて後のねぢり花
庭の苔黒くかたまる炎天下
七年の闇を残して蟬の穴

大阪 中島 霞

お迎へ火家族こぞりて門に出で
ぽきぽきとをさな喜び苧殻折る
盆料供無縁仏も別膳に
送り火の余燼を望の月照らす
盆提灯仕舞ふ静かに時流れ

兵庫 中島 節子

トンネルを出る度空の高くなり
曼珠沙華武蔵決闘の碑を囲む
花野にも勢力争ひほの見えて
牛稻架の意味教はれり峽も奥
鉄骨の新しき稲架組み上り

大阪 中田 寿子

三つ編みの頃に戻れるソーダ水
電子辞書手垢拭えば涼新た
刻刻と浄土いろどる酔芙蓉
葡萄棚大阪駅の屋上に
洋梨は巴里の味だと伊達男

神奈川 永塚 尚代

白熱の原発論議熱帯夜
人の名のいかな出てこぬ暑さかな
鍵開けるその束の間に蚊の餌食
宣誓を終へて童顔夏の空
サングラス一人大きくなりにしかに

大阪 野口喜久子

天上の夫の一喝日雷
文字摺草の螺旋を伝ふ雨雫
佛壇が塵に捨てられたる極暑
鉛筆を削る匂ひも夜の秋
聞き及ぶ「さ」の字のさまに昼寝なほ

兵庫 蓮尾みどり

夏休み折りしも山下清展
原爆忌鳩と子供と折鶴と
平成の孫の知らざる御器囃り
新豆腐入りのドーナツ・ハンバーグ
もういいよ頑張らなくて秋風鈴

兵庫 長谷川 鮎

小春日に櫓柱の手斧あと
狭間閉じ天秤櫓小春なり
堂内に小春日の洩る隙間あり
唐松の落葉散り込む二重窓
唐松の落葉帰宅の靴底に

兵庫 林 哲夫

羅を居間に広げて形見分け
女子チーム勝ちて風鈴しづまりぬ
炎屋に投げるも打つも怒鳴りつゝ
手作りの昼寝の枕孫に貸し
盆提灯探しあぐねて納屋に暮る

兵庫 林 美智

残暑なか封切館へ老四人
何もせず六十六回の終戦日
みみなれし朝の合唱蝉しぐれ
はつなりの野菜もかざる盂蘭盆会
切り西瓜後生大事に帰路急ぐ

愛媛 福島 松子

曖昧な相槌ばかり大海月
熱風を纏ひて路面電車来る
窓開くる度飛び込めり蝉の声
蝉時雨癩癩の子も大音量
初めての親子連弾夏休み

愛媛 福田かよ子

手で持ちて足しやぶる嬰汗ばんで
炎暑なかバーコードはずし退院す
石の牛裂け目に寶銭夏休み
熱帯夜バイク捻らせ十八才
熱帯夜物干しで眠る妻のゐて

兵庫 藤井久仁子

乗鞍の夏の星座に首凝らす
吊橋は一人づつなり七つ瀧
飛込みし蝉と一夜を過ごしけり
涼やかに百歳の葬坂のぼる
早き瀬のしぶきに滲む花山葵

兵庫 藤田かもめ

急流の奇岩を躲す權涼し
船頭のほまちの一つ鰻の漁
土用干し候文の軍事便
自分史の白眉はやはり終戦日
みちのくや水澄むたつき待ち遠し

兵庫 史 あかり

一通の信書涼しく過去を呼ぶ
夏館白磁の壺の底光り
喉仏まだなき少年西瓜食む
水中花水に心を開き初む
道場に正座黙想敗戦忌

兵庫 古井公代

羅の舞姫ダイヤの臍飾り
炎昼を闊歩黒衣に眼だけ出し
トルコ路に大玉西瓜五十円
ハイレムの緑蔭科と猫寄り来
山蟻や人は地下都市這ひ下る

大阪 古林田鶴子

空蝉のカラカラと行く杖の先
土用芽の魔物の如く伸び廻り
炎帝のほしいまゝなる石畳
炎風の抜け行く径やかくれみち
炎昼のピタツと物音失せる刻

香川 細川 知子

サーファアの着替へすばやし白き尻
浜木綿の潮騒とどく土讃線
盆僧の経の小節は祖父ゆづり
糸とんぼ草から草へ遠出せず
ぎんやんま指輪にほしき胸の青

鈴の奏

品川鈴子選

夏の宵声主わかる路地の角 兵庫 増本 明子

檀家回り僧のお供のバナマ帽

犬囀んで羽音激しき落下蟬

「あばら家で避暑」の便りは穂高から

空蟬のみんな拌んで地に還る

身のほとり少し片付け七月盡

予科練に行つてそのまま大夕焼

見上げればあの世の標夏の月

久々に天の川見る里帰り

水浴びのしづき振り撒く親子象

見物の児等もパンダも昼寝中

登園の児等に準備のミニプール

苔むして幾年経しや石灯籠

庭の木々常より静か星月夜

亡き母の衣擦れ聞こゆ盆提灯

天窓に切りとられたる星月夜

行きずりの船場ことばの涼しさよ

兵庫 西田 敏之

帰省子のかの地節電身にしてみても

やれ遅刻刹那とまどふ昼寝覚

浴室をおほふ朝顔影ゆれて

唐突に義兄の訃なり蟬しぐれ

炎屋にひ孫合掌義兄は逝き

葬送の笙箏築や夏は行く

猛暑にも球音響く甲子園

真夏日に白髪ふえし婿に逢う

トウシューズ履きし幼の夏舞台

蝉時雨祈りの声に唱和して

噴水の風にあおられ弧を描く

老どちの半跏の坐禅堂涼し

戦没の学徒慰霊碑苔の花

アロハシャツひとつの記憶とみがへる

再診の予約の朝や秋暑し

庭胡瓜やんちや坊主のごと曲る

心太すすりて遠き夫の影

兵庫 本木下清美

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 島本 知子 //

*選句は全て 品川鈴子

「あばら家で避暑」の便りは穂高から 増本 明子

暑中見舞いが沢山くるが、大抵は紋切り型、そんな中で心をぐいと掴み最も印象的なのは「あばら家で避暑」とぶつきら棒な文言。上五と結語が両極端の配合で意表を突く。何しろ山小屋は必需品だけで寛ぐ粗末な建物なのに対し、片や避暑とはゆったり贅沢な休暇。それもその筈でスタンプは穂高の山便り。努力で得た極上の避暑に違いない。

予科練に行つてそのまま大夕焼 村元香須子

一九三〇年に開校の海軍飛行予科練習兵養成は、旧制中学四年か高等小学校の修了者の志願制で茨城県土浦の霞ヶ浦が有名。多くの若者が夕焼けに紛れて、飛び立ったまま戻らない。夕焼けを仰ぐと戦に散つた若い面影が惜しまれて、夕焼け色の機影が帰還するのをひたすら待ちたい。

久々に天の川見る里帰り 堤 節子

すっかり都会暮らしが長引いて、久しぶりの里帰り。郷里も大方建て替えられているが、歩いて家路を辿りながら、ふと空を仰ぐと銀河がくつきりと際立つて見える。そういえば空気の澄明度が違う、子供の頃のままに天の川が待っていてくれる故郷。

天窓に切りとられたる星月夜 堀口香代子

天空を「切りとる」とした発想が良い。天窓の限られたフレームでまるで絵画を鑑賞するかのように星空を眺める贅沢なひと時。見ている間にも星の数、煌めきは変わりゆく。

行きずりの船場ことばの涼しさよ 西田 敏之

私は大阪の船場の問屋街近くにある会社に勤務しているが、「船場ことば」を耳にすることは無い。暑い中、商人の町を歩いている時に偶然聞こえた「おこしやす」などの

なめらかで優しい言葉。清涼感が感じられる。

を呼び起こす。

猛暑にも球音響く甲子園

松尾 静代

庭胡瓜やんちや坊主のごと曲る

本木下清美

近年の夏の暑さは半端じゃない。そんな中、夏の日差しをもろに受けて全力でプレーしている高校球児達。乾いた球音は清々しい。

大事に育てたが曲がつてしまった胡瓜を「やんちや坊主」と捉えたところが面白い。曲がつたところで味は変わらない。やんちやな胡瓜と思えばむしろ楽しく食べられる。

トウシューズ履きし幼の夏舞台

中村 吟子

幼な児を抱きしめしあの終戦日

八幡 操

トウシューズは女の子の憧れ。幼いうちからレッスンに通い、念願のトウシューズを履けるまでに上達した。晴れ姿で踊る幼女に観客は拍手喝采したことであろう。

終戦と聞いて親が子どもを抱きしめたのにはいろんな思いが込められていたことだろう。日本が戦争をしていない時代に私は生まれて、親になって、ラッキーだと思う。

アロハシャツひとつの記憶よみがへる

荒木 稔

汗の噴く手足不自由の身の動作

木曾 鈴子

アロハシャツだから、思い出したのは昔旅したハワイでのワンシーン。フラダンスでも踊られたのであるうか？思い出のある服はいつまでも捨てがたく、衣替えの度に記憶

手足が不自由であっても、それを嘆いたり、人に甘えることなく、自分のことは自分で一生懸命頑張って生きておられる姿が目につかぶ。(以下略)